

目次

はしがき 松尾 聰 一

研究篇

女の書く物語の発端 今井源衛 七

話型から表現へ——源氏物語「さすらふ」ノート—— 関根賢司 二九

源氏物語の表現と深層テキスト——二条東院から六条院へ——

..... 東原伸明 五九

源氏物語における発想の形式——広義の〈思想〉としての話型——

..... 島内景二 九五

「幻」巻における光源氏の自己救済をめぐる高橋文二……………三九

大君の結婚拒否追考——宇治十帖論序説……………武原弘……………二七一

源氏物語の観音寺院の存りよう……………渕江文也……………一九三

源氏の供人——主従関係の一面……………柳井滋……………二三五

源氏物語作中歌論(一)——『紫上晩歌』をめぐる……………野村精一……………二五三

資料篇

『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』解題および翻刻……………伊井春樹……………二八一

研究篇

最新刊の『新釈とりかへばや』（田中新一・田中喜美春・森下純昭、風間書房刊）の解説中、今本の女主人公（女中納言）像の文学史的位位置づけについて触れられた箇所、拙論を引きながら、次ぎのように記されている。

宰相中将を忌避して宇治を出奔する女主人公について、（今井ハ）「これはあきらかに若菜巻以降の紫上であり、夕霧の女二宮であり、『夜の寝覚』の女主人公の夫に対する感情であり、『狭衣物語』の一品宮や女二宮の狭衣に対する違和の感情である。女中納言には、平安後期物語に一貫する夫に対する違和感に悩む女心というモチーフがありそうである」と位置づけられ、（略）この作品全体の主人公を女中納言とし、その「心的推移」をたどることを改作者の目的と見る見解は、右の今井氏の論あたりから始まった。これは正論であり、現在の「とりかへばや」論の多くはこの方法で進められている。

引用された拙論は、昭和五十一年に刊行された角川書店刊の鑑賞日本古典文学「堤中納言物語・とりかへばや」の中のものである。それ以前にも、桑原博史氏による、女中納言の心情を重視すべしとの論もあるにはあったが、それにして、この発言には、我ながらかなり冒険の感があり不安であった。しかしその後、右の解説にも述べられているような学界の情勢となつてきて、実のところ、拙論も市民権を得たかと、正直に言つて、ひと息入れた思いである。

さて、本論は以上のような論とその内容上で深い関係がある。右に述べたとおり、私は既に「若菜以降の紫の上」に始まつて、夜半の寝覚・狭衣物語・今とりかへばやと続く平安朝後期の物語の女主人公に一貫する心情として、夫に対する違和感を指摘したのであったが、ここではそれに付随するものとして、彼女らにしばしば見受けられる今日の我々にとつて異様に見える結婚の形態について、いささか考えてみたいのである。その事は単に平安後期という時代的な問題だけではなく、それらの物語が男によつてではなく、女性によつて書かれているという事実とも深く関わっているとされる。十世紀の初頭に物語が姿をあらわして以来一世紀の間、その作者はまず例外無く男性であつたものが、紫式部の登場によつて、以後それはほとんど女性にとつて代わられる。その作者の男から女への転換が、作品内容に甚大の